

Background

KIは、頭脳集団である技術者、研究者、あるいは設計者の知的生産性の向上を実現するプログラムです。また、技術KI計画活動の過程で、チーム化とリーダーの成長により職場力が向上し、組織風土の活性化をも実現できます。

日本を代表する大手メーカーや情報システム開発企業に多く導入され、現在、250社、2万人の導入実績があり、コンサルティングプログラムの核心に、「見える化」「ワイガヤ」「気づき」などがあり、見える化ブームのさきがけといわれています。

- ◆ 現場力、組織力、チームワーク力を高めたい
- ◆ 個々人のモチベーションを高め、技術の現場を活性化したい
- ◆ 目標に挑戦できる強い技術チームにしたい
- ◆ ミドルマネージャー、テマリーダーを育てたい

このような経営課題にお応えします。

Viewpoint

本プログラムのコンセプトと特徴

KIは、日常の研究・開発成果を最大化するための、チームのパワーアップ活動です。

個々人の活性化と、チームとして ビジネス成果を出し続ける知的生産性の高い集団にすることを狙いとしします。アプローチは「日常／現実直視」を重要視し、正しい問題認識に基づいたチーム全員による活動です。

◆ コンセプト

持続的な改善力（マネジメント力）を獲得し、変化の時代の事業貢献を担う強いチームづくり。「ワイガヤ」「見える化」「合意と納得」によるマネジメント革新

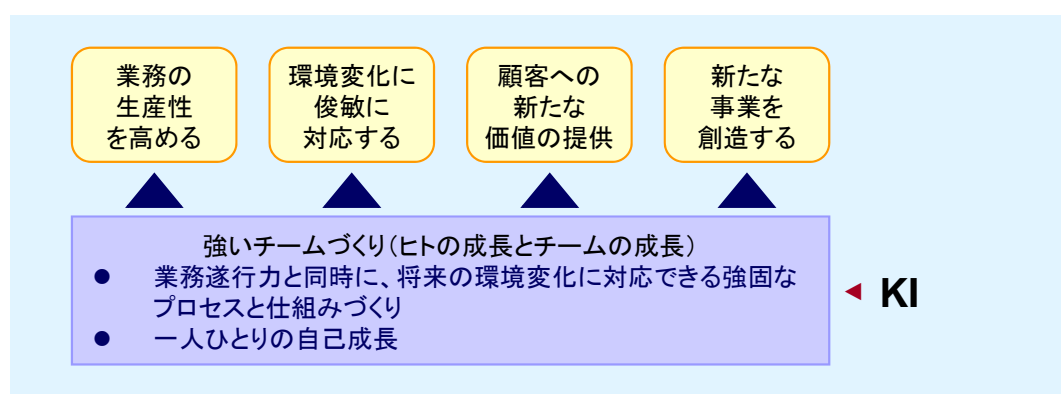
◆ 基本スタンス

従来の成果志向型の活動ではなく、チーム力を高める活動仕事を通じて、ヒトの成長とチームの成長を図る

◆ 主な特長

1. 1年間のプログラムで、成果の確実な創出と自走化
2. 組織風土診断プログラムによる状態変化の定量的把握
3. ヒトの成長とチーム成長を支えるマネジメントツール

業務の見える化を実現する「計画システム」
 業務をフロントローディング型にする「課題ばらし」
 成長を見える化する「YWT」振り返り
 マネジメント層の参画を促進する「仕掛け」



Our Practice

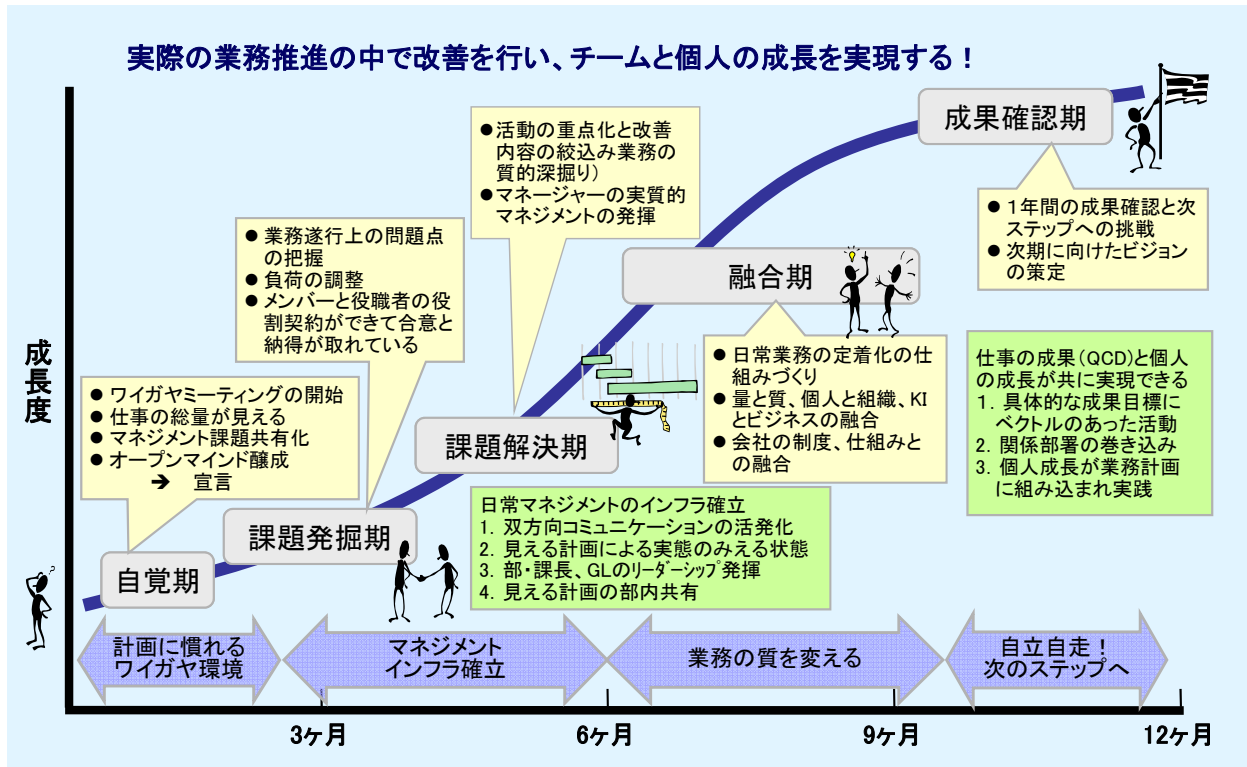
●これまでのKI導入プロジェクト数：437件（1995年～2004年）

業種	形態	プロジェクト数	プロジェクトの対象部門			
			開発系	管理系	研究系	その他
製造業	組立型	250件	140	40	70	0
	装置型	102件	30	20	52	0
サービス業		75件	50	15	0	10
その他		10件	0	8	0	2

●最近の「KI」の導入企業例

導入企業	KI導入の狙いと特徴
自動車メーカー	<ul style="list-style-type: none"> ● 激化する技術、品質競争の中で、今後も優位性を維持していく ● 従来から強いトップダウンによる改善力だけでなく、これからは現場力が重要となる
化学品メーカー	<ul style="list-style-type: none"> ● 研究開発の成果を事業へ結びつける「事業化KI」の展開 ● 研究の「見える化」により、シナジー効果を狙った研究所統合の成果を形にする
ソフト開発会社	<ul style="list-style-type: none"> ● 受身、突発対応型から提案型集団へと変わり、ヒトの成長とビジネスの成功をはかる ● 業務の「ワイガヤ化」「見える化」による先出しジャンケンマネジメント
精密機器メーカー	<ul style="list-style-type: none"> ● 開発現場を活性化し、生産性向上と商品開発力強化 ● 「アウトプットの見える化」「課題の見える化」「業務の見える化」によるチームでの知恵のだしあい。技術者の知恵を高めるマネジメント

Consulting Step



Publication, etc.

- ・「技術者の知的生産性向上」 日本能率協会マネジメントセンター（1993年10月）
- ・「キャノン高収益復活の秘密」 日本経済新聞社（2001年12月）
- ・「工場管理2003年4月号特集KIプログラムによる工場スタッフ活性化作戦」 日刊工業新聞社
- ・「日経情報ストラテジー2007年7月号3分間キーワード基礎用語（P31）」 等多数